

恐かった横浜大空襲に想う

港南区支部 金子 スエ（妻）

戦没者 金子 政春

戦没地 サイパン島

戦後六十五年思えば永い年月でした。私も四月で九十三歳になります。

横浜大空襲の時は主人が太平洋戦争出征中。娘二人は集団疎開でした。一才八カ月の男の子を背負い五才の男の子の手を取り、出来たばかりの横穴防空壕の一番奥に入りました。後から隣組の人が大勢入って来ました。

どの位経ったか外が騒々しく飛行機の爆音と焼夷弾のバラバラ落ちる音がした時、係員が「危ないから出る」と言いました。皆一斉に飛び出したのですが、一番奥に居たのでおくれ外に出たら足元に火が飛んできました。

係員が「もう駄目だから元の穴に入れ」と私の背中を押したので又穴に入りました。誰もいない真っ暗な戸の隙間から煙と火の粉が入ってくる。本当にもう駄目と思いい子供を抱きしめて「死のうね」と言ったら「死ぬのはやだよ」と言われ、はっと驚き気を取り直し夢中で煙と火を防ぎました。時間は分からないが静かになり係員が「終わったよ、もう大丈夫だ」と知らせてくれま

した。

外には死体がごろごろ道端に横たわっている。後の話では隣組の人や町内の人は殆ど黄金町駅で亡くなられたそうです。背中の子は泣きもせずぐったりしていました。夢中だったので負ぶっていたのも忘れかけもう死んでもいいとあきらめていました。

二、三日防空壕にいて、義兄の家は磯子方面で焼けなかったのでお世話になりすぐ近くの医者に診て頂き、肺炎の峠を越しているから心配ないと言われ「有難うございます」思わず泣きました。考えれば今まで泣かなかったのが不思議でした。

この子は運の強い子だ。八月十五日の終戦の報せ。近所の方が「坊や戦争が終わったからお父さん帰ってくるよ、よかったね」と頭をなでてくれました。疎開の娘達も帰ってきて親子五人揃いました。さあ住む家を探そう。

市内は焼けちやって駄目だから金沢八景の方面ならあるかもと教えられ、子供を負ぶって八景から山の方に行き通る人に尋ねました。此所は大道という所ですから此所の町内会長さんに聞いてもらなさいと地図まで書いてくださいました。恥も外聞もなく伺いましたら早速大きな百姓家に連れられ納屋を貸して下さいました。但し主人が帰るまでの約束です。やっと水入らずで暮らせる事ができました。

娘達は山へたぎぎ拾い、田圃では「のびろ」採り、お百姓さんから野菜を分けてもらい、たまに魚や貝等売りに来るのでどうやら貧しいながら楽しかった。

翌年二十一年少し落ち着いた所へ主人の公報です。昭和十九年七月八日サイパン玉砕の報せあ

り、心配し覚悟はしていてもです。

子供に箱の中を見せてくれとせがまれ開けたら小さい白い紙切れに金子政春の霊と書いてありました。子供はがっかりした様子、私は頭をがんと殴られた気持ち。又家探し。幸い私が新聞配達しているお客様で市役所に勤務の方が気の毒に思い南区の母子寮をお世話して下さいました。当時はなかなか入れなかったそうです。私は幸せ者です。

昭和二十二年になり又近所の人の口添えでホテルニューグランドに勤める事が出来ました。昭和二十二年八月から三十三年間働きました。退職して今日で三十年になります。あの恐かった大空襲から振り返りますと私は四人の子供のお陰です。子供に励まされ生きる力をくれました。又行く先々で多くの人が親切にして下さいました。昔の諺に『渡る世間に鬼はなし』只今子供二人孫六人ひ孫六人です。新年会、誕生日会とかあると全員集合で食事をして記念写真を撮り楽しんで居ります。